



長倉三郎先生を偲ぶ

Maki KAWAI 川合眞紀 分子科学研究所所長, 日本化学会前会長

分子科学研究所の設立の立役者のお一人である長倉三郎先生は、第二代分子科学研究所所長として1981年4月から1987年3月まで分子科学研究所の運営に携われました。総合研究大学院大学は、大学共同利用法人の17研究機関を研究活動の母体とする大学院ですが、長倉先生は国を代表する研究機関と直結した大学院教育の重要性を唱えられ、総合研究大学院大学の設立に大きく貢献され、1988年4月から1995年3月まで初代学長を務められました。長倉先生はまた、先端的な学問を推進されるかたわら、国内外で科学振興にも大きく貢献されました。日本学士院長として、日本化学会会長として我が国の科学行政を主導され、1981年にはアジア人としては初めてIUPAC会長も務められました。我が国からは、2012年に名古屋大学の巽和行先生が会長を務められましたが、先陣を切られた長倉先生に続いて、インド、韓国、中国などアジアからの会長が選出されるようになり、国際的にアジア諸国の認知度を向上することに貢献されました。

長倉先生は、1981年3月まで東京大学物性研究所で研究室を主宰されると同時に、特殊法人時代の理化学研究所で主任研究員として「理論有機化学研究室」を主宰され、多くの優れた研究者を育ててこられました。我が国の分子科学分野の発展を支えた先生方の中にも長倉先生のお弟子さんたちは多くおいでで、我が国の分子科学の発展そのものが、長倉先生を1つの起源としていることが窺えます。分子科学研究所設立に際して記された大学共同利用機関のあり方についての長倉先生のご持論は、現在にも通じるもので、40~50年先をも見通した学術政策であったことに改めて長倉先生のスケールの大きさを感じております。

私自身、一学生として長倉先生の講義を受ける機会もありました。背筋の伸びた凛としたお姿で朗々とした通る声での講義は緊張感のある時間でした。物性研の先生方は、通年の講義をされることはなく、スポットでの講義でした。学会での総合講演と合わせても数えるほどの機会でしたが、長倉先生のお話はいつも数



分子科学研究所近景

字を含め大変正確に話されるのが印象に残っています。最後に長倉先生と直接お話ししたのは、2006年だったと思います。茅幸二先生の文化功労者をお祝いする会の席でした。祝辞を述べられた後、皆さんが椅子を勧めたのですが、立食の席だったこともあり座ることを固辞されます。大人数の席でしたので、少しゆっくりとされてもとも思いましたが、どこまでも凛とした長倉先生でした。

1975年に設立された分子科学研究所は今年で設立46周年を迎えます。共同利用に供する先端機器の配備は、長倉先生が共同利用機関の機能として研究所設立時からその必要性を強調されたところでした。共同利用研究所を支える支援の建物である附属4棟はだいぶ老朽化が進んでおりましたが、2年度にわたる施設整備の結果、本年4月には4棟すべて化粧直した明るい姿を公開できる運びとなりました。長倉先生に直接ご報告することは叶いませんでしたが、先生が分子科学研究所に託した、科学研究を先導する研究機関としての役割を果たすべく、これからも全所をあげて精進してまいります。長倉三郎先生のこれまでのご貢献に対して深く敬意を表すとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。